

論 文 要 約

学位論文題目 文学教材を通じた感情体験の探究

—小中学生用文学読書体験尺度の作成と仮説モデルの生成—

氏 名 初澤 宣子

読書は、読者の様々な感情を喚起する。さらに、子どもにとって、読書は感情を喚起するだけでなく、感情を学ぶ意義もあるとされる。近年、こうした読書の感情面に関する知見が蓄積されているが、子どもを対象とした研究はほとんど見当たらない。そうした中で本論文は、子どもが読書の際にどのような感情を体験しているのかについて、明らかにすることを目指したものである。

本論文は、全7章、4つの研究から構成される。第1章「序論」では、本研究全体に関わる問題を提起した。まず、学校における子どもの人間関係に関わる情緒的・攻撃的な問題行動の解消や予防のために、感情コンピテンスを育む必要性和読書の活用可能性を論じた。国内外の学校教育で社会性と情動の学習 (Social and Emotional Learning ; 以下 SEL) といった実践が行われ、感情コンピテンスを育むために読書が活用されている。こうした読書の活用の充実のために、子どもが読書の際に体験する感情や、感情が自己の変容等の読書の効果をもたらす上で果たす機能を明らかにする必要性を指摘した。

第2章「本研究における理論的枠組みと目的」では、関連する先行研究を概観し、本研究の構成と目的を示した。はじめに、文学による感情体験を「文学を読むことによって、認知的評価、情動的経験、読後感といった感情を主観的に体験すること」と定義した。関連する既存の理論的枠組みを整理し、本研究において自己変容感情仮説 (Miall & Kuiken, 1995) を参照する理由を述べた。仮説について、尺度の作成、感情体験に影響する諸要因、心理的効果との関連、授業場面における汎用性といった未解明の課題を検証する必要性を論じた。

第3章の研究1「文学による感情体験の探索的検討」では、文学による感情体験を探索的に検討するために、大学生の自由記述と自己変容感情仮説を参照して尺度項目を作成し、大学生408名を対象に質問紙調査を実施した。探索的因子分析の結果、大学生用文学読書体験尺度として〈浄化感情〉〈投影感情〉〈審美感情〉〈自己変容感情〉の4因子、15項目を抽出した。

第4章の研究2「尺度作成による自己変容感情仮説の探究」では、文学による感情体験を測定する小中学生用尺度を作成し、文学教材の内容や読者の性別、発達段階による感情体験の違いを検討した。研究1の大学生用尺度を参考に項目を作成し、小中学生1195名を対象に質問紙調査を実施した。確認的因子分析の結果、仮説と符合する〈評価感情〉〈物語感情〉〈審美感情〉〈自己変容感情〉の4因子、15項目からなる小中学生用文学読書体験尺度を作成した。尺度の内的整合性、収束的妥当性及び弁別的妥当性について検討し、一定の信頼性・妥当性が示された。さらに、文学教材18作品の感情体験の違いを検討した結果、ストーリーの悲劇性、登場人物の向社会的行動や葛藤と成長の描写といった作品の内

容により、感情体験は異なることが示唆された。また、女子の方が男子よりも、小学生の方が中学生よりも感情体験が高い傾向が認められ、読者の特性の違いによって感情体験は異なることが示唆された。このように、研究1及び研究2の尺度作成を通して、児童生徒が読書の際に自己変容感情仮説と符合する感情を体験していることが明らかになった。また、本尺度を用いて、作品の内容や読者の特性による感情体験の違いを相対的に検討することが可能であり、尺度の実践上の有用性が示された。

第5章の研究3「文学による感情体験の発展的検討」では、文学による感情体験のもたらす心理的効果を検討した。具体的には、SEL実践に期待される心理的効果と対応する悲しみ、怒り、同情という感情状態が文学による感情体験からどのような影響を受けるのか、読書前後で感情状態に違いが見られるかについて検討した。小学5・6年生250名を対象に質問紙調査を実施した結果、〈評価感情〉が悲しみの緩和、〈自己変容感情〉が怒りの抑制、〈自己変容感情〉及び〈物語感情〉が同情の高揚をもたらす可能性が示唆された。こうした知見は、SEL等の実践への読書の活用を想定した場合、目標や対象者に適した文学教材を提供する上で参考になると考えられた。

第6章の研究4「授業における自己変容感情仮説の探究」では、授業場面における文学による感情体験について検討した。SEL実践として、文学教材『きつねのおきゃくさま』を用いた全14回の単元指導計画を立案し、11枚のワークシートを作成した。対象者は小学2年生1学級21名、実践者は担任教師であった。児童のワークシートの記述を分析した結果、児童は授業中に自己変容感情仮説と符合する感情を体験していると推察された。一事例実践であることから結果の一般化には限界があるが、仮説の臨床的汎用性と小中学生用尺度の適用可能性が示唆された。

最後に第7章「結論」では、本論文における4つの研究を通して得られた成果と残された課題についてまとめた。具体的な理論的貢献として、文学による感情体験に関する既存の理論的枠組みをより精緻化した、「刺激-体験-効果モデル」を提案した。また、実践的貢献として、学校における読書を用いたSEL実践だけでなく、理的感情行動療法や認知行動療法のように読書を用いる心理臨床にも示唆を与え得ると考えられた。今後、さらに量的検討や実践的検討を重ねることで、文学による感情体験を活用した子どもへの支援が広がっていくことが期待される。